

深大寺散策（2022年6月26日）

駒澤大学部会 竹田 努
(三井住友信託銀行OB)

梅雨晴れの日、駒澤大学の留学生3名(韓国からの二人とフランスからの学生)と三井V-Net会員4名とで東京郊外、調布市の深大寺を散策しました。

深大寺は、都内では浅草寺に次いで二番目に古く8世紀に創建された古刹(こさつ)です。また、2017年に国宝指定された釈迦如来像(都内で唯一寺院に安置されている国宝)を拝観することができます。

この企画は、留学生との一対一交流の中で留学生から「お寺に行きたい」という希望から生まれたもので、他の留学生や会員にも広く声をかけ実施しました。このような企画を、駒澤大学部会では年度初めに計画する「グループイベント」に対して「この指とまれイベント」と呼んでいます。

当日は大学最寄りの駅から私鉄とバスを乗り継ぎ、深大寺の近くで降りて歩き始めました。

先ず、バス停近くのソバを栽培している一画で、江戸時代からの深大寺と蕎麦(そば)との関わり、歴史を紹介しました。

続いて、「不動の瀧」と呼ばれる水場では、現在の東京西部、その周辺地域に6世紀初めには朝鮮半島からの渡来人が住んでおり、古代から湧き水の豊かなこの土地はこれらの人々の水源地であったことを説明しました。

山門近くには、調布市の名誉市民であった漫画家・水木しげるにちなんだ鬼太郎茶屋があり、カップが出迎えてくれました。

本堂脇には大きな無患子(ムクロジ)の木があります。そこでは、追羽根の絵を見せて日本の正月の羽根突きを説明し、このムクロジの種が羽子の球に用いられることを話しました。同行の会員のお一人が自宅のムクロジから採った種を事前に用意していただき、それを皆に配りその硬さ、大きさを実感して記念に持ち帰って貰いました。

江戸時代末期に建てられた旧庫裏では、土間や当時使われていた釜、石臼などを見て、その頃の生活を想像して貰いました。

元三大師堂では、「おみくじの祖」と言われ、またその霊力により平安時代から近世、現代まで、上流階級から庶民まで幅広い信仰を集めた元三大師について、いくつかのエピソードを紹介し日本の宗教事情、宗教感覚の一端を知ってもらいました。

深沙大王堂では深大寺発祥にかかわる水神伝説を紹介し、そのエピソードから男女の縁結びの信仰を集めていること、またその水神・深沙大王と玄奘三蔵の西遊記との関係などを紹介しました。

境内で最後に拝観したのは釈迦堂です。ここには2017年国宝に指定された釈迦如来像が安置されています。この像は深大寺創建前、畿内で造られた7世紀後半白鳳期を代表する仏像です。また、昭和の半ばまで元三大師堂の裏にあり顧みられなかったものが再発見されたものです。このエピソードは留学生の興味を引いたようでした。

境内の主なお堂を1時間程かけて案内しました。コロナ禍でなければ皆で蕎麦を味わいたいところですが、一行揃っての飲食は避けることとし自由散策の時間を小一時間取ることとしました。その自由時間では、それぞれ蕎麦を食べたり、土産物を探したりして楽しみました。

深大寺は都心から1時間ほどで来ることができ、門前には蕎麦屋、茶屋、土産物屋が多数並び、高い建物はなく、一回り、二回り前の時代の雰囲気味わうことができます。

留学生は、歴史的に渡来人が住み着いていた地域性、朝鮮半島や大陸からの文化の影響、日本の宗教文化・生活文化を見聞し肌で感じ、国宝の仏像を拝観し、さらに日本の食文化「蕎麦」を味わった盛りだくさんの一日でした。

以上

